

「命にいたる門から」 —マタイによる福音書講解説教 34—

詩篇 第100篇 1～5節
マタイによる福音書 第7章 13節～14節

説教 岡村 恒牧師

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからは行って行く者が多い。」(13節)主イエスの《山上の説教》の中の一節です。新共同訳聖書では、驚きを強調して、「その道も広々としていて」、「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか」と翻訳しています。

山に登って、大勢の群衆をご覧になった主イエスは、飼う者のいない羊のような人々を深く憐れまれたように、今ここにいる私たち一人一人を憐れんでお語りになっています。自分を打ち叩いて、困難な道を歩めと、何かとても難しい課題を与えておられるではありません。徹頭徹尾憐れんで下さって、確かな救いの道をお示しになったのです。

しかし私自身、長く聖書を逆さまに読むことができました。信仰を持って生きるというのは、わざわざ困難な道を選んで、狭い門から入り、細い道を歩むことだと思い込んでいました。そうして、聖書を読む私自身が、いったい何をしたら良いかと、《私》を主語にして読むことができました。ところが聖書には、《神がこの私のために何をしてお下さったのか》、というように書いてあったのです。聖書の主語はいつでも《神》です。

今日の御言葉には、確かに信仰の道が描き出され、主イエスからの勧めの言葉が記されています。27節までに4つの選択肢が示されていますが、いずれの場合にもはっきりしていることは、〈第3の道はない〉ということです。命にいたるか滅びにいたるかの2つであって、それ以外の道はどこにもありません。狭い門から入り、良い実を結び、天の父の御心を行い、岩の上に家を建てるとするのは、いずれも命にいたること、神に喜ばれること、嵐に耐えて生き延びることと結びついています。何か他の道を選ぶとか、途中から別の道にそれて行く、という話しは出てきません。私たちは重大な局面で、一つの道を選んでその道を歩み続けるのです。

かつて私は、人生の分岐点で、あるいは日常生活のささいな場面で、繰り返し選択を迫られるたびに《私の選択》が何よりも大事だと思い込んでいました。狭い門から入る決断をし、狭い道を通り抜けて行かなければ命にいたることなどできない、と私たちは思うのです。確かに、狭い門は洗礼に、細い道は信仰を持って歩む人生にたとえられます。

しかし聖書の主語は《神》です。主イエスご自身が、「私は門である。わたしをとおってはいける者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。」(ヨハネによる福音書 第10章9節)と言われ、「私は道であり、真理であり、命である。」(Ⅱ 第14章6節)と言われました。主イエスが門や道の話をされたのは、主イエスご自身をくぐり抜けるようにして命を得、主イエスを通して永遠の命を得るように、という話なのです。

私たちは、自分で門や道を選んで進んでいくものではありません。誰もが入る門ではない門を通り、誰もが楽々と通るような道ではない道へと招かれて歩みます。主イエスに招かれ、イエスに出会った人をパウロは、「この道の者」と呼びました。主イエス・キリストを信じて生きる者は、命の道である主イエスを通して生きるからです。

主イエス・キリストは、私たちに命を与えるために門となり、道となって下さいました。主イエスは、すべての人を招き入れる門として開かれている門です。しかしその招きに応えて入って来る人は決して多くありません。自分で選んで、狭い門を通ることは不可能だからです。ただ神に招かれ、その招きに応えて神を信じて歩み出す者だけが、この門を通して行きます。本来、この門から入ることなどできない者を、主イエスは造り変えて、神の国の祝宴へと導き入れて下さいます。御子の血によってその衣が洗われ、真っ白な衣を着た者たちが、やがて終わりの日、神の前に進み出て、神の国の祝宴の座につきま。誰でも、主イエスを信じ、信仰をもって歩むなら、神はその人に門をくぐり抜けさせ、困難な狭い道を共に歩んで導いて下さいます。御子の霊、助け主なる聖霊は、私たちと共に歩み、時に私たちを背負ってまで、この道を歩ませて下さるのです。

狭い門、細い道は、確かに信仰を持って歩く道の困難さを言い表しています。しかし同時に、神の選びと招き、祝福の確かさを言い表しています。だから私たちはこの道を、多くの信仰者と共に、終わりの日を目指して歩み続けます。世界中の信仰者と共に、主の食卓を囲みながら、この道を共に歩んで行くのです。

(記 岡村恒)